

## 出れない2 サンプル

ここに閉じ込められてから三か月が経った。そうと分かるのはタブレットに言ってカレンダーを用意してもらったからだ。セックスやプレイに必要なもの以外何もなかった部屋は、今では普通に生活できる場に変わっていた。

時計も窓もある。窓の外では季節感の分かる草木が見えた。窓は開かないけれど、雨が降るときもあればびゅーびゅーとうるさいくらいに風が吹く日もあった。

ここに来て一週間は毎日プレイを楽しんだ。気持ちいいことも痛いことも。愛を伝え合うだけのセックスもたくさんした。この世界ではどれだけ動いても身体は疲れないし、精子が枯れることもない。

けれど、心は違った。興奮が続き、精神が疲弊したのだ。それからはセックスのペースを減らすことに決め——なんだかんだ一緒に居ればしなくなってしまうので——今では週に二回と決めて過ごしている。本当はもっとしたい。けれど、それだって焦らしプレイの一つになっていると思えば乗り越えられた。それにセックスをしない日であっても赤ちゃんプレイは日常として続いていた。オムツへの排泄、そして哺乳瓶。おしゃぶりもあるし、可愛らしいぬいぐるみも。ふわふわのテディベアは一番のお気に入りだ。

そして今日はセックスの日。安西は昨夜からそわそわしていた。もちろんその様子に気付かない篠崎ではなかったし、寝る前にはわざと煽るように身体を何度も撫でられた。乳首をツンと突かれた回数なんて数えきれない。したい、と目で訴える度に「赤ん坊はそんないやらしい目をしてないよ」と諭され、赤ちゃんとしての抱っこをされて焦らされ寝かしつけられたのだ。

「おはよう」

「おはようございます」

一緒にベッドで起きて、おはようのキス。それからおしっここの時間。

「おしっこは」

「まだ……」

無意識のおねしよはまだできない。早く寝ている間におねしよをしたいのに。起きてすぐにオムツを確認されて、「いっはい出たな」って言われたいのに。

「じゃあ抱っこでおしっこしようか」

「はい……」

抱っこでのおしっこは大好きだ。でもそれは起きているときにもできる。だから早く、少しでも早くおねしよができるようになりたい。

「諒くん」

「……はい」

「焦ることはない。時間はたくさんある」

「……はい」

ここを出るには夢精をしなければならぬ。これだけたくさんセックスをしていけば——週二回と言えどもセックスの日は朝から晩まで途中に休憩を挟みながらもセックスしつぱなしなのだ——夢精するようなことは成り得ない。だから時間はある……のだけれど、それでも早くと思つてしまふ気持ちは消せなかつた。早くおねしよを褒めてほしい。

「ほら、おしっこ。溜めているのはよくないよ」

「はい」

最近の排尿は、足を開いて座る篠崎の間に座り、後ろから抱きしめてもらうようにしてお股の部分を手で包んでもらいながらするやり方だ。出せばすぐにその温度を感じ取られ、「上手に出せてる」「いいこだ」と褒めてもらえる。恥ずかしいけれどとても気持ちいいおしっこの仕方。

「んっ……」

「えっちな声だ」

「だつて……」

「諒くんはいやらしいから今日を楽しみにしていたんだよな」

「はい……」

ここに来てから、随分と性に正直になつたなど自分でも思う。でも開き直るくらいの気持ちではないと、オナニーで使つた妄想をDVD化されたものなどとてもじゃないが観られない。今ではもう観られるのも快感で「今日はこれを観てください」なんておねだりすることもある。ああやつぱり週二回じゃ足りない。

「考え事か？おしっこが出ていないよ」

「あんっ」

お仕置きのようにきゅつとオムツを中身ごと掴まれた。気持ちいいけれど、嬉しいけれど、それをされると勃起してしまつておしっこが出なくなつてしまふ。

「ダメ……」

「何がダメ？」

「勃起しちゃう……おしっこ出なくなっちゃうから……」

「勃起していなくても出せていないだろう。先に白いおしっこを出してみようか」

「やつ……黄色いおしっこ出したいです……」

今日が楽しみで、昨夜はいつもの二倍ミルクを飲ませてもらったのだ。それ以外に水も飲んだ。あわよくばおねしよのままセックスに、と思つていただけで、うまくはいかなかつた。そのせいで今膀胱はパンパンなのだ。下腹部を押されたら出てしまふそうなくらい。

「じゃあ考え事なんてしないできちんとおしっこしなさい」

「ごめんなさい……」

お腹に回された腕に縋るように抱きつき、尿道を緩める。しよろ、と温かいものがおちんちんを包み込んでいく。

「あ……ああ……」

「うん、上手に出せてる。温かいよ」

「やあつ……ああつ、いっぱい……いっぱい出るっ」  
おしっこは全然止まらない。

「すごいな。オムツから出てしまうかもしれない」  
「やだあ……」

「どうして？オムツ漏れは赤ん坊にはつきものだろう」  
「あつ……」

オムツ漏れなんて考えたこともなかった。けれど想像したらとても恥ずかしくて、興奮する。  
「オムツ漏れ、したい？」

「したい……」  
「じゃあオムツは替えないでおこう」

「えっ」  
「オムツの吸水量を超える必要がある。もしくはオムツをあてるときにずらしておくか。あとはずれるほど動き回るか」

どれも魅力的だった。けれど、やはりオムツを替えないというのが一番よかった。重いオムツをぶら下げて歩く。オムツ漏れするほどおしっこを出せたら篠崎は恥ずかしい言葉できつと虐めてくれるに違いない。

「……オムツ、替えないで……」  
「蒸れておちんちんやタマタマが痒くなってしまってもしょうがないよ」

「……そしたら、お菓塗ってくださいますか」  
「ああ、もちろん。そうしよう」

話している間に排尿は終わっていた。いつもなら寝転んでオムツを替えてもらうのだけれど今日はそのまま。ベッドから下りてゆつくり立ち上がると、オムツは重さで少しずり落ちた。

「さあ、朝ご飯に行こう」  
朝ご飯、それはすなわち哺乳瓶で与えられるミルクだ。毎食篠崎が作ってくれるミルク。

ここにいる間は飲食の必要はないらしい。確かに喉が渴いたり腹が減るということはない。けれど飲むとすれば飲めるのだ。まだ食事は摂っていないけれど、きつと空腹を感じなくても食べられるに違いない。食べたら排泄が必要になるのだけれど。

「さあ、できたよ」  
ソファに座った篠崎の膝の上で横抱きにされながらミルクを飲む。哺乳瓶は篠崎が持ってくれるので安西はただ口を動かすだけでいい。本当の赤ちゃんになれる時間。そう思うのに、ミルクを飲みながら篠崎を見るとたまに勃起してしまうのだ。

「んきゅ、んきゅ……」  
美味しい。篠崎が優しい目でこちらを見ている。嬉しい、幸せ。愛されている。

「ん……あ……」  
「ん？どうした」

乳首が口から外された。どうしよう、恥ずかしい、けれど恥ずかしいことを知ってほしい。

「……勃起……してしまいました」

「ミルクを飲みながら勃起したのか」

このやりとりだってもう何度目か分からない。日に三回から四回のミルク。そしてそのうちの半分は勃起してしまうのだ。

「ごめんなさい……」

「今日はオムツ漏れするまでオムツは替えないよ。それでも良ければ白いの出そうか」

「……我慢します」

「わかった」

本当はおしっこでパンパンになったオムツ越しにおちんちんを揉まれたかった。けれどオムツ漏れをしたときに気持ち良く一気に射精したいという思いもあった。いや、射精自体は何度でもできるので『オムツ漏れまで興奮を高め続けたい』が本音だ。

「さあ、全部飲めるかな」

もう一度口を開くと乳首を含まされる。舌と上あごで押し潰し、ミルクを飲み干していく。もつと飲みたい。でもお水や利尿作用のあるコーヒーも飲みたい。だってたくさんおしっこを出したい。早くおしっこをしてオムツ漏れをしたい。

「よし、全部飲めたな。いいこだ」

篠崎が哺乳瓶を置いた。このあとは甘えさせてもらう時間。

「んっ……篠崎……」

「うん、どうした」

「ちゅう……」

男らしい首に腕を回し、額を頬に擦りつけて甘える。

「どこにっ」

「お口……」

「哺乳瓶からミルクを飲んでいたこの可愛いお口かな」

身体を離され、下唇を親指でなぞられる。下半身に響く声にうっとりとしてしまう。

「あ……」

「赤ん坊のはずなのにえっちな顔になっているな」

「あ、やあ……」

いやいや、と首を振る。赤ちゃん扱いをされるのは大好きなのに、えっちな気分るときまで赤ちゃん扱いをされるとどうしたらいいか分からなくなってしまう。だって赤ちゃんには性欲がないはずだから。だから勃起もしてはいけない気がしてしまうのだ。

けれど篠崎は全てを受け入れてくれた。

「おちんちんを勃起させた可愛い赤ん坊の諒くん」

返事をする。「可愛い」と言われたのを自分で認めてしまうみたいで、頷くこともせずにと視線を合わせた。

「ほら、お口。キスするんだろう」

「ん……」

目を閉じて少しだけ口を突き出すようにするとすぐに触れる柔らかいもの。篠崎のキスはとても気持ちがいい。唇がふわふわしているのだ。見た目は薄いのに、柔らかい。

「ん……あん……」

濡れた舌は唇を舐めるのに、中には入れてくれない。欲しい。篠崎の舌を舐めたいのに。

「やだ……いじわる……」

「えつちなキスはまだダメだよ。オムツ漏れするまでは赤ん坊でいなさい」

次の尿意まであとどれくらいあると思っっているのだろうか。まだ時間は朝だけれど、これではあつという間に今日が終わってしまう。でもそれを言ったらどれほどセックスに飢えているのかと呆れられてしまいそうで言えなかった。

「諒くん、今日は何をしようか」

そう言いながら篠崎は焦らすようにオムツを撫でる。ぬくもりの冷めた、ぼわぼわのオムツ。

「……決めてください」

「諒がしたいことをしよう」

DVDはまだ観ていないものがたくさんある。けれどどこにいる限り減る一方だ。なんとなくそれも寂しい。けれどずっと一緒にいるのにオナニーしたいとも言えない。

「篠崎がDVD増やしてください」

「オナニーして、じゃなく増やして、か。本心はそこにあるな？」

勘の良すぎる篠崎。的確な指摘に顔が赤くなる。

「今日はたくさんオナニーをしなさい」

「はい……」

「ああ、でもオナニーはオムツ漏れをしてからだよ。今はただ、どんなオナニーをしようか考えるだけにしなさい」

「はい……」

~~~~~

「ピアッシング道具一式を出してくれ」

タブレットに向かって言うだけで瞬時に出現する道具。篠崎は淡々とその道具を確認し始めた。

「拘束は」

「……いりません」

おちんちんは興奮でドクドクと脈を打っている。胸の鼓動もうるさいくらいだ。

「……おちんちん、萎えるか射精するか……」

「射精してしまったらごめんなさい……」

「そしたらお仕置きだ」

「はい……」

目を瞑り、シーツをぎゅっと握る。剥き出しの乳首に冷たいものが触れた。ツンとした匂い。消毒だ。

「動かないように」

乳首が何かで挟まれた。冷たい。そっと目を開きそちらを見ると、穴の空いた毛抜きのようなものが乳頭を挟み潰していた。そしてその穴に剥かってニードルが向けられている。怖い。怖い。怖い――

ブスツ――

「あああああああああ！！！」

痛い。胸が熱い。痛い痛い痛い。右乳首が焼ける。

「終わったよ。おちんちんはどうか」

「あ……ああ……」

視線を下ろしそこを見る。乳首は針が刺さったままの状態になっていた。

「あ……乳首……乳首……」

乳首に針が刺さっている。その光景だけでくらくらしてしまいそうだ。妄想と現実は違うのだと思ひ知る。こんなに痛いことで射精なんてできるはずがなかった。

「諒、きちんと答えなさい。おちんちんはどうなった？」

必死に篠崎の言葉を咀嚼し、意識を下腹部に向ける。

「……お漏らし……お漏らししました……」

オムツの外にあるはずの太ももや腰が濡れていた。まだ生温かい液体。

「痛みで萎えて、失禁したのか」

「ごめ……ごめ……」

「可愛いよ。謝ることはない。さあ、もう片方も頑張ろうな」

~~~~~

『パパ！』

映像が再生されてすぐ。画面いっぱい、笑顔の安西が『パパ』と嬉しそうに呼んでいる。しかし相手の顔は出てこない。「父親か？」篠崎がそう言った途端、篠崎とは別の声が『諒』と呼んだ。途端、画面がプツリと切れた。

「え？」

「諒」

篠崎がテレビを消したのだ、とすぐにわかった。手にリモコンを持っていたから。そして、怒っている。篠崎が怒るところを見たことは今までほとんどない。医者プレイのとまぐらいだ。

「諒は他の男にあんなに可愛い笑顔を見せて、パパと可愛らしく呼ぶのか」

「え、ちよっ、あの」

誤解だ。最後まで観てくれたら全て分かるのに。

「パパと呼びながら他の男に抱かれる想像で抜いたんだろう」

「やっ、しのっ」

違うのに。

「お仕置きだ」

「やだ、篠崎ッ」

話を聞いてほしい。そうしたら全て分かるのに。誤解が解けるのに。けれど篠崎は聞く耳を持たなかった。安西の手首を掴まれ、寝室に連れ込まれた。

「しのぎきっ！」

「パパだよ」

「え……？」

ベッドに放り投げられた。怖い。篠崎が本気で怒っている。

「パパに抱かれないんだろう？」

「や、しの……」

「嫌？ どうして？ 俺ではなくパパに抱かれないんだろう？」

「ちがっ」

「どう違うんだ」

(怒ってる……！)

怖かった。篠崎の怒っている姿。本気の怒り。それほど年は違わないのに、大人の男の怒りだった。父親を知らない安西にとっては未知のそれ。

「パパだよ。呼びなさい」

「……篠崎、僕、父親を……知らないから……」

母親の記憶でさえほとんどない。父親なんて、会ったことがあったのかすらわからない。

「……」

篠崎は無言を貫いていた。怒りを収めた様子もない。けれど強引に事を進めようともしない。

「パパにお仕置きでお尻ペンペンされてみたいって……思ってる……」

そう思ったことがきっかけで、このDVDにあるような想像をしてオナニーしたのだ。

「だがそれでオナニーしたんだろう？」

許さないよ、と篠崎は言った。オナニーであっても他の男なんて絶対に許さない、と。

「諒、お尻を出しなさい」

「え……？」

「お尻を叩かれたかったんだろう。知らない男をパパと呼びながらお尻を叩かれることを想像しながらオナニーをしたんだろう」

篠崎はもう、安西の言葉を聞いてくれそうにはなかった。でもこの嫉妬と独占欲が嬉しいと思っってしまった。おずおずと篠崎の膝の上にお腹を乗せ、オムツをずらす。

「諒」

「……パパ、僕をいいこにしてください」

~~~~~

錠剤はすぐに溶けた。味もないそれはあつという間にその存在を消す。

「諒、大丈夫か」

「はい……あの、お腹……」

「どうした」

下腹部に手を当てる。なんだか温かい感じがするのだ。

「ここ、お腹の中がなんだか温かいです……」

ほつとするような、じんわりするような温かさがあつた。

触ってみて、と篠崎の手を取った瞬間、そこは通常の体温を取り戻した。

「……治った……」

「卵がお腹にやってきたのかな」

「あ……卵……」

「諒くんの卵。楽しみだな」

「はい」

腕枕で寝転んで、お腹を撫でられながらのキス。労わられているみたいでくすぐりたい。きつと妊娠したら——受精したら篠崎はこうやって温かく包んでくれるのだろう。

「篠崎……」

顔中に唇を押し当てられる。数えきれないほどのキスは幸福と安堵をもたらす。

「うん……」

こういうときの篠崎はとても柔らかい。普段から優しいのだけれど、優しいより柔らかいになる。しつとりと包み込んでくれるような。

「精子、欲しい……」

「諒……」

なぜだろう。身体の中に卵があるからだろうか。精子が欲しい、受精したいと身体が訴えている。セックスがしたいとか、気持ち良くなりたいたいとか、興奮しているとか、そんなことは全くないのだ。ただ身体が精子を欲しい、精子を求めると訴えている。

「卵に精子……篠崎の精子をください……」

少し頭がぼーつとする感じがする。通常の思考力が衰えて、ただひたすらに精子を欲しがっている。

「うん……受精させようか」

「ここ……ここです……」

人格さえ乗っ取られてしまったような気がするほど心は穏やかで、それなのにただひたむきに精を求めている。

そういうえばオムツは外されたままだった。布団を退けておちんちんを持つ。

「ここ……この穴に篠崎のおちんちんを……」

わざわざ言わなくても篠崎は知っている。それなのに勝手に口が動いてしまう。

「奥に卵が……激しくしても大丈夫なので、一番奥で精を出してください」

「……諒」

篠崎が何かを言いかける。首を傾げて続きを促したけれど、篠崎は口を嚙んだ。

「篠崎、精子……」

気になるけれど、それより早く精子が欲しい。

「ああ」

どうにも欲しくてたまらず篠崎の肌に触れる。お互いさっきのセックスの後で裸のままだ。胸に唇を寄せ、軽く吸う。

「あ……あ……何……?」

「諒?どうした」

自分でも制御できないほどの発情だった。急な発情。まるで篠崎の肌がスイッチだったかのような。

「あ……早くっ、早く欲しいっ」

助けて、と篠崎に縋る。そして求めていた通り、篠崎は強く抱きしめてくれた。

「大丈夫、一緒に気持ち良くなるうな」

「あ……ダメ、ダメなんです……」

「諒?」

身体を離され、心配そうな顔で見つめられた。

「ダメ……僕は……」

これはどういふことなのだろう。体質が変わったのだろうか。何か他の生物にでもなった気分だ。薬の効果なのだろうけれど、「今の身体」常識が頭に流れ込んでくる。

「諒、何がダメなのかな」

「僕……僕はイっちゃダメなんです……」

「どうして?」

なぜ自分はこれを当然のこととして知っているのかは分からない。分からないけれど、今はその疑問より先に理由を篠崎に伝えなければならなかった。

「僕の卵は膀胱と前立腺の間にあるので……僕がイってしまうと僕の精液が卵に掛かってしまうんです」

「……そうか」

「それに射精して体力を使ってしまうとその後の産卵の体力が持たなくなってしまうんです。だから……だから僕をイかせないでください……」

「……わかった」

篠崎の手が勃起しないおちんちんを掴んだ。

「勃起は？」

篠崎はもう、安西の中に受精や産卵の知識が入っていることを分かっていた。

「できません……柔らかないとおちんちんを迎え入れることができなくなるので」

「そうか」

本当は勃起したい。勃起して、おしっここの穴を犯されて射精したい。尿道を擦られ、奥を突かれて中出しされながら射精したいのに。なのに、本能がそれではいけないと告げている。だからこんなに興奮しているのに勃起ができない。

「おしっここの穴を消毒するよ」

「ダメです、そのままです……」

「だが、」

「今は普通の状態じゃないんです……交尾期だから、大丈夫です。女性とのセックスだって膣を消毒したりはしないでしょ」

「……わかった」

篠崎はそれでも心配だったのか、自らの手を消毒してからおちんちんに触れた。皮を剥き、顔を出した亀頭を穴を拡げるように親指で左右に割られる。

「痛くないか」

「大丈夫です……気持ちいい……」

穴はぐつと拡がっている。当然だ。だって今からここにおちんちんを入れてもらうのだから。

「気持ちがいいのか。すごいな。指を入れても？」

「はい……中を慣らしてください……ローションもいりません……」

うつとりと目を閉じる。爪がないと感じるほどきちんと手入れされた指先が挿入された。気持ちいい。

「ああっ……気持ちいい……」

「すごい。絡みついてくる。ここに入れたらすぐにイってしまふな」

「ンッ……精子早くほしいっ」

「まだダメだよ。指だけでもとても気持ちがいいんだ。堪能させてくれ」

篠崎もうつとりしているようだった。お尻に指を入れてもらうときでもそんな反応は見なかった。そんなに気持ちいいのだろうか。今後もしお尻よりおしっここの穴の方がいいと言われたらどうしよう。でもそれもいいかもしれない。だって皮だってオナホールとして使ってほしいと思っていたくらいなのだ。

「あつ、ん……あんっ」

篠崎が指の抜き差しを始めた。尿道内が擦れる。お尻ほど擦られることに慣れていないそこはひどく敏感で、尿道の肉が敏感にその動きを感じ取る。まるで指のシワに秘肉が引っかかっているのが分かるかのように。

「あ、あああっ！」

気持ちいい。目を閉じて尿道内の感覚に意識を研ぎ澄ませていると最奥まで指が突き入れられ

た。おちんちんが短く上に萎えているので簡単に奥まで指が届いてしまうのだ。

「ここが一番奥だよ。どうかな」

「あつ、あああああ！！」

篠崎の指先が最奥をこりこりと捏ねる。前立腺に当たっている。気持ちが良くておかしくなる。「あああつ、あああつ！！だめえつ！！」

気持ちいい。なのに交尾期だから勃起はできない。苦しい。イきたいのにイけない。

~~~~~

その夜――。

「ああああつ！！」

「諒？！」

その激痛は寝ているときに突然訪れた。

「あああああ！！！！いだい！！！！いだい！！！！いだい！！！！」

「諒！！！！どうした、どこが痛い？！！」

「タマツ、タマタマ痛い！！！！」

痛い。陰囊が張り裂けそうな痛み。爆発する、割れる、壊れる。

「諒！！！！……諒、ゆっくり息をして」

「いだい！！いだい！！いだい！！いだい！！いだい！！」

握り潰される痛みは経験がある。篠崎にしてもらったことがあるから。けれどこれは違う。内側からの痛みだ。内側から外側へ圧迫するような痛み。激痛という言葉では足りないほどの激痛。

「ああああああ！！！！いだい！！！！いだい！！！！」

卵が動いている。痛む場所が少しずつ変わってきている。産卵の準備に入ったのだ。

「諒、諒！大丈夫、ほら、手を握ろうな。ゆっくり息をするんだ」

「あああああ！！」

シーツを握りしめていた手を包まれ、力強く握られる。シーツよりそちらが良くて、手を返した。

「いいこだ。いきむと痛い。ゆっくり息を吐くんだ」

息と一緒に痛みを逃すことをイメージしてと言われ、激痛に涙を流しながら必死に息を吐く。

「そう、上手、上手だ。卵が動いているの見えるよ」

「あああつ、いだいっ！！」

「うん、痛いな……痛そうだ。けれどお話しすると呼吸が止まってしまうから、ゆっくり息をしよう。諒くんがたくさん痛みに耐えているのは分かっているよ。痛いな」

篠崎が分かってくれていると思うとそれだけで気が楽になった。痛いときに「痛い」と言ってしまうのは誰かに痛みをわかってほしいからなのだと初めて知った。

「うん……痛いな、タマタマがとても痛いな……大丈夫、裂けてはいないよ。ほら、卵がゆっく

り動いてる」

落ち着かせるように、篠崎がゆつくりと話してくれる。それだけでとても楽になる。発せられる言葉に意識を向けるだけで、痛みしかなかった思考に変化が生まれる。

「あああ……しのざき、しのざき……いたい……」

痛みを訴える叫び声から縋るような声になる。

「二人の卵なのに、諒くんだけつらい思いをさせてすまない」

「しのざき……」

そんなのずるい。そんなことを言われたら頑張るしなくなってしまう。

「ううううー……」

出れないの続編です。

エロしかありません。

約4万8千文字です。

宜しくお願い致します。